

「学校の閉校に向けて」

福井市殿下中学校 3年 寺澤 七美 (てらさわ ななみ)

私の通っている殿下小中学校は自然豊かな山あいには位置しています。様々な植物、動物に囲まれ、小学生四人、中学生四人で楽しく過ごしています。行事では、地域の方と協力し、少人数ながら色々な活動を行っています。

そんな私の自慢の学校ですが私の卒業する今年度に中学校が閉校してしまいます。生徒数が減少しているため、仕方がないことだと思いますが、自分の母校がなくなってしまうのは、とても悲しいことです。

少子化、過疎化が進んでいる今、学校の閉校が跡を絶ちません。文部科学省の調査によると、二〇一八年～二〇二〇年までに閉校した学校の数は九九九校。たった二年間でこれだけの数の学校がなくなっていることに衝撃を受けました。

この現状を目の当たりにし、私が思ったことは、小規模校はそんなに減らさなければいけないのかということです。確かに、人数の少ない学校をなくすことは妥当だと思います。しかし、小規模校には沢山のメリットがあります。一つ目は、人間関係に悩むことがない点です。私は、小学校に入学前、人と接することが苦手で、周りにとけこめるか不安でしたが、人数が少ないため、自然にみんなと仲良くすることができました。また、先生との距離も近いので、話や相談もしやすいです。二つ目は、自主性を養うことができる点です。小規模校は人数が少ないため、行事などで沢山の役割がまわってきます。実際、私も生徒会長を務めています。そのような役割をこなしていくことで、人の前に立つことが苦手でしたが、リーダーとして先頭に立つことができるようになりました。この経験は、将来、社会に出ても役立つと思います。

他にも、学校があると、地域を活性化できるなどのメリットもあります。このメリットだけを見ると、小規模校をなくさないべき、と言いたいのですが、残念ながら、学校が閉校することに決まってしまいました。そんな中で、自分たちの母校を守るため、私達殿下中学生は「DENG Aプロジェクト」という活動で、閉校後の学校の再活用について考えています。

去年、私は修学旅行で、県内の休校した学校を再活用した施設を三件訪れました。どの施設も学校が、カフェや宿泊型体験施設、子供の遊び場などに生まれ変わっていました。学校のリノベーションは地域の方が中心となっていており、再活用について沢山の話を聞きました。やはり、施設の維持費、人件費、PR、そしてリノベーションの費用などの問題が浮き彫りになっていました。

私は「学校は“休校”ということになっていますが、もし再開したらどうしますか」という質問をしました。地域の方は「休校も廃校も同じだから、再開することはない」と答えてくださいましたが、私はその時の地域の方の寂しそうな目が忘れられません。

私はいつも「廃校」という表現を使わないようにしています。なぜなら「廃」には「すたれる、古くなって役に立たなくなる」などの意味があるからです。学校自体はすたれてしまっても、自分達の学校での思い出は、すたれることはなく、変わらず心の中に残り続けます。

これからも、学校の閉校は増えていくかもしれません。しかし、学校には、再活用するなど、可能性は充分あります。「廃校」という言葉だけでくくらないでほしいです。

私達の殿下中学校は、閉校に向けて、今も「DENG Aプロジェクト」を進めています。閉校までに、学校での思い出を地域の方とつくり、その思い出を残していきたいと思います。そうすることで、学校はなくなってしまうても、思い出は形としても、自分の心の中にも残ると考えます。

学校の閉校は避けようがないことですが、それから考えることが大切です。この先、ずっと殿下校の思い出が残ることを願って、私達は今も、活動しています。